



# 石の文化が語る地域の歴史

## 石切所

立春過ぎとは名ばかりの二月十日、東北新幹線二戸駅開業プレイベントとして「市民宝めぐりツアー」が開催されました。

今回は二戸駅周辺を中心に、旧浄法寺街道沿いの石の文化を訪ね歩く内容でした。

駅前を中心街を横断し石切所小学校のわきを通って、浄法寺町、安代町と結ぶこの細い道は、藩政時代の福岡通代官所管轄の各村落を通る主要街道でした。

現二戸警察署裏手の船場から馬淵川を舟で渡った旅人は、対岸にある古刹・鷲峰山長福寺を初めに見上げることになります。この寺は延宝元(一六七三)年、盛岡城下の報恩寺十一世仏山祖心大和尚の開山といわれており、その山門と境内は石碑の宝庫です。

特に、市の有形文化財に指定されている五輪塔は、あらゆる仏を包括する大日如来を抽象化したものといわれ、下から石を「基壇」「基礎」「塔身」「笠

「相輪」に積み上げ、インド哲学に基づく宇宙の構成要素、生成要素を表しています。

この五輪塔の隣に建つ南無阿彌陀仏碑は、阿彌陀信仰の念仏である「南無阿彌陀仏」を右に刻んだ六字名号碑で、難解な仏教教理より、念仏を唱えれば極楽往生できると信じる人々により、鎌倉時代以降、各地に多く建てられました。

山門わきに建つ三界万霊供養塔は、この世のすべての生き物の霊を慰めるものであり、悪霊がこの世に残り人々に害を及ぼすと考えられていた時代、この霊を成仏させ、村に災いが入ってこないようにとの願いも込められています。

長福寺を後にし、石切所小学校の前を通ってしばらく行くと、大きなカツラの根元に「右浄法寺桂清水 左山みち」と刻まれた浄法寺街道の追分石が目につきます。現在の道路標識の役割を果たすもので、「垂柳の追分石」と呼ばれています。

さて、今回のツアーに参加された皆さまはここで浄法寺街道から離れ、晴山地区の高台にあ

る深山神社を訪れました。

この神社は、一説には天正(一五七三―一五九二年)のころ、九戸郡軽米町晴山から分霊したといわれ、祭神は保食大神です。古書によると豊受大神、宇賀御魂命と同一神ともいわれ、衣食住・五穀の守護神、商売繁盛、厄除開運、無病息災、延命長寿に御神徳があるそうです。

この境内も多彩な石碑の宝庫であり、正面右手には六観音の

一つである馬頭観音、また、一生に一度の信仰の旅として伊勢参りとともに流行した金比羅参りの記念碑である金比羅山碑、そして、この地方の信仰の旅である十和田山参りの記念碑があります。

これらの旅は精進潔斎で身を清め、地域の人の見送りを受けて出る覚悟の旅であり、成し遂げた時の喜びは大きく、地域の安寧を祈願したお札を持ち帰り、皆で祭ったそうです。

そのわきには、農村信仰の「十二様」を祭る山神碑や、修験信仰の遥拝所としての役目を果たす出羽三山碑があり、離れて、



深山神社

「日輪」と「月輪」が併刻された庚申・廿三夜碑の巨碑が見えます。これは「待ち信仰」として発達した民間信仰碑であり、折爪岳や大崩崖に懸かる月の出を待ち焦がれた当時の人々の姿がしのべられます。

これら多くの石碑を抱える石切所地区は、その名の通り石工が多く住み、石うすが名産であったといわれており、信仰の深い土地柄を今に伝えていきます。

今回巡りませんでした。二戸市に現存する最古の石碑といわれる市指定有形文化財「上里板碑」もあります。これは鎌倉時代の嘉暦三(一三二八)年に建てられたものですが、最近発見された諏訪前遺跡との関係など今後の研究次第で、二戸の歴史に新たな光をもたらす可能性を秘めた碑です。

